

視察報告書

報告者氏名 田中洋次郎

委員会名：教育福祉常任委員会

期間：平成30年10月23日～25日

視察都市：川崎市 姫路市 高浜市

平成30年10月23日

《川崎市 川崎市立東菅小学校の学力向上に向けた取り組み》

創立48年で現在児童数は516人 15クラス 特別支援級4クラス。

神奈川県重要文化財の「菅の獅子舞」を始め歴史資産が多い。付近には梨農家が点在している。

平成26年に川崎市教育委員会教育課題 「思考力育成研究推進校」に認定された。それまでは学力についても体力についても平均的な学校だった。

5年前より「思考力の育成」を学校経営の柱と位置付けたカリキュラム・マネジメントを進めている。従来の、教師が「見通しと振り返り」を中心にした授業から、子ども自身が「見通しと振り返り」をもてる授業を作り、子ども自身が「自分の成長」「友達の存在価値」に気づく授業を進めている。既習した内容を用いながら、その知識をどう活用するかにこだわった授業をしており、児童は授業中も様々な意見を自分から発信している。教室机のレイアウトも先生だけでなく児童同士が向かい合ってアクティブに意見交換ができるような配置になっている。

学校生活を通して、子どもたちに、自分自身を見つめる力、他者から学ぶ力、経験や既習を関係付けて問題発見・解決する力を養っている。実際に教室に行くと児童の発言の中には「〇〇さんが言っていたことから更に展開して」などと他者からの意見を聞き入れた上で自らの考えを発信していた姿を見た。

基準を設けることを徹底し、効果をタイムリーに比較でき、理解を深めさせる取り組みをしている。例えば食塩とミョウバンの水溶性を覚える際に、従来は食塩を溶かしてみて、その後にミョウバンを溶かしていた。比較と関連づけ

を取り入れることにより、食塩を基準としてミョウバンの溶け方を比較する。その後食塩とミョウバンを比較して溶ける量を水の量や温度と関連づける実験を行っている。

全ての授業において「思考のすべ」を育てるための取り組みがなされている。学校全体の教育方針が一本化されており、全ての先生が方針に従い自由に授業を進めている。

子どもだけでなく、先生にも効果が出ている。キャリアの浅い先生も指針が理解できているので、仕事をしやすい環境になっていると感じる。生徒をコントロールするのではなく、リードして主体性を尊重しているので毎日発見が多く、充実しているように感じる。

保護者についても変化が現れている。計画がスタートした5年前から保護者アンケートを分析している。最初は戸惑いの声やアクティブラーニングに対する感想が多かったが、5年間で保護者のアンケートの内容が具体的でビジョンに対し明確な理解をした上での回答が増えているらしい。

授業だけではなく、校内には廊下や窓の至る所に、思考力を育成するための具体的な質問の例題やスローガンが可視化されている。また、感性を高めるために芸術に関する情報や様々な本が用意されていて、読書のスペースも確保されている。

学力という数値を求めず、自己肯定感と思考のすべを育てることに注力して取り組んできた。テストのスコアをあげる為の教育とは違う形で取り組んで来たが、結果的に全国学力・学習状況調査の結果も5年前よりも大幅にスコアが上がっている。

<所管>

私立の学校でなく、市立の小学校でこのような取り組みが実現していることに非常に驚いた。授業に集中して積極的に子どもが関わっている姿は素晴らしかった。

教育指導要領の改定を控え、この様な実例を見られたことは非常に価値がある。県の推進校に選ばれているが多額な補助金が出ている訳ではない。

自己肯定感が高く、他者の力を借りながら知恵を使える子ども達が育つという環境を提供していることに大きな価値を感じた。他者を受け入れることの力を知っている子供達の姿を見て、イジメなども発生しにくい環境だと感じた。

先生も働きがいのある職場であり、常に毎日改善されている風土があった。

是非とも横須賀でも研究が必須の事例だと感じた。

平成30年10月24日

《姫路市 姫路市生涯現役推進計画》

平成28年現在の日本の高齢化率は27.3%、横須賀市は平成27年現在で29.6%、姫路市は平成28年現在25.7%。

高齢者が健やかで充実した生活を送り社会を支える一員として活躍してもらうための政策が必要であった。長くなった高齢期を心豊かに過ごしていただけるようにという思いから生涯現役推進計画を策定することとした。

平成18年2月「生涯現役プロジェクトの実現に向けて」を取りまとめ、平成21年4月姫路市総合計画がスタート、平成22年3月姫路市生涯現役推進計画策定した。

計画策定にあたってまずは姫路市の現状把握することからスタートし、高齢者を取り巻く環境やニード、生活実態や市民意識の調査を行った。

調査をもとに生涯現役を構成する三つの柱を余暇の充実 ②社会参画 ③健康生活に設定し、その為の基盤として、環境整備と意識啓発にも取り組んでいる。

計画を進行するだけでなく、進行管理にも力を入れている。数値目標を設定し、PDCAサイクルに則って活動をして、評価や改善内容を把握・公表している。

①余暇の充実

学習や教養を得られる15種類の講座や、農業や園芸の体験ができる6つの講座や体験、外へ出かける為の交通安全教室や、施設の入場料やバスの優待助成も提供、文化芸術の発表会や作品展なども企画も沢山設けている。

②社会参画

生涯現役人材バンクでは長年培った知識や技能を持つ高齢者を人材バンクに登録して地域や学校などの様々な場所で活躍をしてもらう登録と依頼のコーディネートを行なっている。

その他にも高齢者が参加できるボランティア活動が多く存在し、起業支援や起業支援資金融資制度などもある。

③健康生活

健康に対する講座や、高齢者スポーツ大会の開催、ウォーキングマップの作成、その他様々なスポーツ教室も行っている。

①②③を行う為の土台としてバリアフリー化などの「環境整備」や、メディアを使っての「意識啓発」を行っている。

所感

姫路市と比べても高齢化が進んでいる横須賀市において高齢者の生きがいと健康を創出する事は大きな課題である。現状の問題点やニーズなどの現状把握からスタートして、目標設定をして結果についても可視化していくことにより進捗がわかることは非常に良かった。

目標達成率が非常に高い事にも感銘を受けた。生涯現役人材バンクは本市においても同様の取り組みができると感じる。

日本全体においても人生 100 年時代を迎えて、健康寿命を延ばす事、年金問題解消のためにも現役世代を 65 歳から 70 歳に延長することが注目される中、未来を見据えた取り組みは非常に参考になった。

平成30年10月25日

《高浜市 学習等支援事業》

高浜市は愛知県豊田市の南 トヨタの企業城下町。豊田自動織機の本社があり、企業の動向によって一喜一憂している現状がある。面積は13.11平方キロ人口48,297人 屋根瓦の生産量が全国一 第二次産業就業人口51.8%も全国一 B1 グランプリで鶏めしが有名。

生活保護率の全国平均が17.1%に対して高浜市は4.16%と非常に低い。現時点は高齢化が低い高浜市だが、低いからこそ将来に焦点を当てて、今のうちから介護を受けない様に予防していく必要性を考え、「宅老所」という介護予防

の拠点を立ち上げた。平成12年の時点で今後ヘルパーが不足するだろうと予測して、ヘルパーになる為の講座を開講。受講者の協力を受けて人口の1割が宅老所ボランティアに参加した。

福祉相談の総合窓口を駅前に設け、困ったことがあったら、「とりあえず『いきいき広場』へ」という意識が浸透し、窓口のワンストップ化をはかり、困りごとはまず広場のスタッフが聞き、担当の部局を呼んでくるというサービスを展開している。

小学校区単位で「まちづくり協議会」を設立して活動をしている。自分たちのエリアの課題は自分たちで考えて解決する。

子どもの将来が生まれ育った環境によって左右されることのないよう、また貧困が親から子へ連鎖する「貧困の連鎖」を発生させない為の取り組みとして学習等支援事業「ステップ」を実施している。小学校高学年から高校卒業まで、子どもの成長段階に即した切れ目のない貧困対策を実施している。

環境が整っていない子でも学習意欲がある子は問題ない

学習意欲、学習習慣、生活習慣が整っていない子に力を入れている。

市内の中学生1,500人 困窮世帯160名 10%以上 不登校の小・中学生は121名 就学援助28.9%

平成27年開始当初は中学生が対象だったが、受講した中学生が高校に受かった後、「今後の自分たちは来ちゃいけないのか。居場所は。」との声があり、28年に高校卒業資格が取れる年齢まで延長をした。

実施責任者1名 学習等支援を行う職員2名 チャレンジサポーター4～8名（大学生）

学習支援だけではなくイベントの実施や食事の提供も実施している。地域協力による食事の提供 1食100円。宅老所での昼食ボランティアの協力などもあり17の団体が代わる代わる支援している。

子ども食堂支援基金の創設

市民にも理解を求め、97件、138.7万の寄付が集まった。運営する為の資金は年間約30万の支出なので約3年分の運営費用が集まった。

課題としてはチャレンジサポーターの大学生を集める事に苦労している。

チャレンジサポーターと担任との連携ができた事で不登校の子が学校に行けるようになった。

こども貧困対策会議の設置

機会を与えることが目的ではなく、手をあげられない子どもたちにどうアプローチしていくか。

ステップの実績（平成29年度）

年間実施回数は61回、参加生徒数は延べ1,263人（平均20.7人）、チャレンジサポーター延べ337人（平均5.4人） イベント開催15回

生徒・保護者アンケート調査の結果からも「学校には通えていないが勉強がわかるようになってきている」「生活のリズムが整い、学校の課題ができるようになった」など多数の肯定的変化が生まれていることがわかる。進路状況も事業開始の27年から29年までで中学3年生登録者の全員が第二希望までの進路に進むことができた。

ステップ実施についての工夫としてスティグマへの配慮をしながら子どもの状況に合わせて、学校の担任、ケースワーカー、子ども健全育成支援員と分担しながら全ての生活困窮世帯の中学生等、及び保護者に利用推奨を実施している。

学習支援をするチャレンジサポーター（大学生）の安定的な確保のために、チャレンジサポーターも成長できる育成プログラムを実施して、感謝状や活動証明書を授与している。

ステップと教育委員会、学校、地域の方々の中にコーディネーター役として子ども健全育成支援員が貢献している。そういった取り組みが地域の方々の心を動かし、地域団体による「こども食堂」が開設され支援の輪の広がりを生んでいる。

所管

全国や横須賀市と比べても高齢化の低い高浜市が、将来に向けて視点を持ち、様々な事前対応に取り組んでいる姿勢には非常に感銘を受けた。人口規模は1/8なので単純に比較は出来ないが、ワンストップで相談が出来る体制は市民の安心感向上に直結すると感じた。

生活困窮世帯の多い本市においても沢山の子ども達に学習支援の必要性を感じる。参加した生徒全員が希望の進路に進めたことは素晴らしい。

近隣に大学がない中、苦勞をしながらもサポーターを集めているが、本市においてはその点について近隣に大学や専門学校もあり、環境が整っている。

地域の方々の協力を得ながら横須賀でも是非取り組みたいと感じた。